

## 【英国便り】

### 2025 年春初頭のロンドンより 「今を活躍する3人の女性アーティスト達」

鳥谷 麻美子  
ロンドン在住

1997 年にロンドンに来てから随分と歳月は過ぎましたが、これまでに私はやはり仕事柄、アーティストの方と出会う機会は多かった方だと思います。特に20年くらい前、最初の砥部焼エキシビションを開催する準備期間から、それまでの学生気分だった私の視野・行動範囲が広がり始まったと思います。自分の今まで知らなかった領域に入って行き、不安だった気がすると共に、それがきっかけで色々なアーティストさんと知り合うようになりました。

今回の寄稿文では最近その中でも特に私の興味を引いた3人の女性アーティストにフォーカスを当ててみることにしました。

#### 【アーティスト1】

峯山スミスソン・じゅん  
(デザイナー・画家・講師)

ロンドン中心地の一部エンジェル地域にあるビクトリア時代の元小学校を改造した建物の一角をご自宅兼スタジオにされているじゅんさんは、私が訪れた日は、ちょうどその週末が締め切りという、ナイキのスニーカーデザインの仕事途中でした。



じゅんさんの自宅兼アトリエを訪問した際に、彼女が見せてくれた絵画。机の上にはデザイン途中のナイキのスニーカーがありました。

彼女と初めて会ったのは、一昨年のロンドン・デザインフェアのトークイベントで、パネラーの一人としていらしていた時に、私のTobe Collectiveのブースに偶然顔を出してもらったのがきっかけでした。私のじゅんさんの最初の印象は、「色が明るくて眩しい！」でした。人から漂う第一印象としてはなかなか珍しいのですが、でも実際この印象はあっているのです。

日本で数年 JAL で働かれていたじゅんさんは、ロンドンに来る前までは仕事と並行して、その当時ではまだ需要の少なかったウェブデザインを勉強されていたのですが、1999年にロンドンの London College of Communication でグラフィックデザインを学ぶためにイギリスに来ました。まだ、日本人学生も今と比べて少なかったその時の様子を振り返られて、じゅんさんは、日本とイギリスのアートの教え方の違いについて「日本の『技術からしっかりと学ぶ』のではなく、まず『個人の表現・コンセプトを重視する』イギリスの教え方が自分にあっていた」と言われました。「技術は後から付いて来る」のような自由な教え方が日本との大きな違い、そしてその反面、学校でメタル・タイプセッティング（金属文字組み）の歴史もしっかりと学ばれます。「歴史を重視しながらも今の自分の意見をしっかりと持つ」という学び方だったのだらうと思います。

卒業後、ブランディングの会社に勤められていたのですが、そこではじゅんさん自身のクリエイティビティを表現することがなかなか難しく、自分で何かしたいと思われた彼女は、色々と考案された中に日本の着物の柄がありました。日常生活に関係のある波や花の柄、それらに目を向けた彼女は、次にロンドンのマンホールデザインに注目をします。そこから彼女の最初のプロジェクトが始まりました。それからは息子さんの誕生や、旦那様の仕事で香港に転居となった彼女ですが、「着物柄 × マンホール」をグラフィックデザインでリミックスしたプロジェクトをトートバ

ックにプリントをして商品化をしたのです。この最初のプロジェクトですが、もうすでに今の彼女の「明るい眩しさ」が顔を出していると私は感じます。



「着物柄×マンホール」をベースに作った  
トートバッグ

写真撮影：Sian Penhallow

香港からイギリスに帰られてから、フリーランスのアーティストとして活躍をされているじゅんさんは、アーティスト活動をされている傍、母校の London College of Communication で講師として教えられています。そこでは、よく生徒さんから「スタイルはどうしたら決められるのか」と質問をされるそうです。そこで、じゅんさんは彼女自身のスタイルについては、70年代、80年代に育った環境にあった、と言われます。例えば、それがお鍋にあったカラフルな柄だったり、当時の今と比べてもっと色の強い、ハローキティであったりと、その当時の「色、そして形」から刺激を受けて今のスタイルがある、と言われます。

MAMIMU のアーティスト名で芸術活動をしているじゅんさんですが、彼女の仕事の中心には「芸術（形と色）を通してポジティブ思考を広げる」という考えがあります。今年の1月にも London Art Fair で、『Art as Medicine (芸術を薬として)』という題目のトークをされていました。この彼女の主義について、じゅんさんはこう言います。「ちょっとした他人の言動で、人は笑顔になったり、幸せに感じる事ができる、というのはすごいこと。」そして、彼女の小さかった頃について

も話してくれました。まだ5歳くらいだった時に、ご実家の近くのバス停でバスから降りて来る人たちみんなに「こんにちわ！」と挨拶をしていたそうです。そこでは「こんにちわ」と返してくれる人もいたし、無視する人もいた。でも、小さかった頃だけど、「こんにちわ」と笑顔で返してくれた時の嬉しさを覚えている、と言います。

今、デジタル社会で、他の人と直接のコミュニケーションをとる必要もなく毎日が過ぎる中、このじゅんさんの「優しさ」はとても重要だと感じました。そして、彼女の作品にはそれが出ていると思いますし、私の最初の「明るくて、眩しい！」の印象も正しかった、と話を聞いて納得しました。

インタビューをした日のロンドンは、相変わらずの灰色の空の雨の強い日でしたが、彼女の空間は何か不思議な色と光に溢れていたような気がします。

## 【アーティスト2】

### 山下瑞代（陶芸家）

瑞代さんのスタジオを訪れるのは今回で4回目でした。毎回感じる雰囲気は「静けさの中の活気」です。それはおそらく瑞代さんご自身から表れているオーラなのであって、実は毎回少しこの雰囲気に気持ちがキュッと引き締まる思いがします。

「Mizuyo Yamashita」おそらく今、ロンドンで陶芸を志している人の中では瑞代さんの名前を知らない人はあまりいないと思います。私が瑞代さんに知り会ったのは2021年のTICEP (Tobe International Ceramic Exchange Program)を通してです。彼女は、その時も感じたのですが、静かだけれど、はっきりと物を言われる方で、ご自分の意見をしっかりと持っていらっしゃることが、少しの会話でもよくわかります。

2000年に英語の勉強をするためにロンドンに着いた瑞代さんは、日本ではインテリアの仕事をしていました。「1、2年の語学留学で日本に帰る予定だった」と言われる彼女

は、ロンドンに来て2年目くらいに、英語を勉強されながら **Kensington and Chelsea College** で陶芸を習い始めます。そしてその傍、陶芸家の **Julie Goodwin** のアシスタントをしながら、少しずつ自身の作っていた作品が売れるようになり、その時のことを、「素直に、自分の作品が人に認めてもらい、売れる、という事の嬉しさを感じた」と言われます。それから少しして、第一のヒットとなる作品が『**The World of Interiors**』（ハイエンドの大手インテリア雑誌）など、多種の雑誌に取り上げられるのですが、同じ頃にオープンをした『**Cavaliero Finn**』（質の高い、洗練された作品を取り扱うので有名なギャラリー。2004年にオープン。）が瑞代さんの作品を、ギャラリーの初期アーティストの一人として取り扱うことになります。ここからはそれからずっと関係が続いており、今年の **Collect Art Fair**（イギリスの工芸の登竜門とも言われるアートフェア。一年に一回、春先にロンドンの **Somerset House** で開催される。）では、瑞代さんの作品も紹介されました。

瑞代さんは努力家です。それは、当たり前のこと、と思うかも知れませんが、これまでの成功は「全うする」という信念と並々ならぬ努力から来られていると思います。20数年前に始められた陶芸ですが、その頃はイギリスはまだ陶芸熱に火はついていませんでした。趣味感覚、と言うのがほとんどで、焼き物となると、プロダクトデザインのような、「美しく、機能付き」のもののほうが主流を占めていました。今だからこそ **Ceramics** と言うと、手仕事芸術の代名詞のようにになっているイギリスですが、日本と比べて、ここでは「作り始めて技術が少々伴ってなくてもすぐに売り出す」という傾向が強いのが現状です。それに対して瑞代さんは、「イギリス人の陶芸に対する目が肥えていない、と言う事実がある反面、作品が面白いと全てを寛容に認める」というのと、「陶芸に対し、目が肥えているから技術に対して厳しく、あまり他のことを認めない日本」の消費者マーケットの違いを言

われます。これについては英語では **Double edged sword**（両刀）と言う表現があるのですが、良き点もあり、悪い点もあると私たちはお互い納得をしました。

瑞代さんは「自身も作り始めて数年で作品がたくさん売れて、その時のことを考えると寛容なイギリスのマーケットが自分には合っていたのかも」と笑いながら言われますが、当時の作品を集めたポートフォリオを見せていただきました。すると、今の瑞代さんとは少し違う雰囲気、でも彼女のデリケートでも力強い雰囲気をすでに醸し出している素敵な作品でした。

派手な物、大きかったり、目立つ物を作られているわけではないのに、この存在感はどこから来るのだろうと考えた時、やはり瑞代さんのクオリティーの高さだと思います。彼女は作る努力と、知識を得る努力、両方ともにこれまでご自身の時間をとことん使われています。日本の産地巡りの間に砥部も訪問、その際には砥部から世界に向けて陶芸活動をされている松谷文生さんが瑞代さんに砥部の案内をされました。



瑞代さんのスタジオでの仕事の様子  
写真撮影：Yu Fujiwara

今回のインタビューで、「20年経ってようやく技術がついてきました。。。と言われる瑞代さん、私の彼女の印象はこれまでも触れたように、「静かだけど力強い」ですが、作品はまるで彼女の一部のようです。モランディの花瓶の静物画をモチーフにしたという、作品たちは静かでも、絶対的な存在感で私に話しかけてきます。



今年の Collect Art Fair での瑞代さんの展示作品

### 【アーティスト3】

#### 多貝尚子 （複合芸術家）

複合芸術、(multi disciplinary art) と言う名前は日本であまり知られていないかもしれませんが。意味合いとしては、多種の科目が含まれている芸術、と言うことですが、尚子さんはご自身のことを説明される時、「複合芸術家」(multi disciplinary artist) と呼ばれています。具体的に言うと、彼女は版画、陶芸彫刻、写真などをメインにアーティスト活動する傍、大学や他の教育機関で、劇場小道具についての講師をしています。私は、一昨年のデザインフェアで Tobe Collective の展示棚諸々の制作を、彼女に任せました。その時から実は、Naoko Tagai というアーティストは一体どんな芸術を作っているのだろう、と疑問に思っていました。

京都出身の彼女は幼い頃から絵を描くことが大好きだったそうです。そして、9歳の時に茶道に出会い、書道も習い始め、茶道の先生がユング派の精神学者と言うこともあり、禅と臨床心理学の関係などもお茶の世界を通して学びます。日本の芸術大学を希望されて、漆芸と洋画を専攻していたのですが、2回目

の試験を受ける時に自分の道を日本ではなく、イギリスに変更する事を決められたのです。

Bath Spa University のファウンデーションコースで油絵、写真、プリントの基礎、そして陶芸を習った尚子さんは、そこから次の3年間に彼女の芸術人生の起点となる先生二人に出会います。一人目は芸術家の Malcom Ross-White、そして二人目は日本人陶芸家、安田猛氏を夫に持つ、陶芸家、Felicity Aylieff。日本ではとりあえず何をするにもデッサン。デッサンの技術なしではどこにも行けない、と言われ、ひたすらその通りに描き続けてきたと言う尚子さんですが、ドローイングを教わっていたマルコム・ロスホワイトに「自由に描け」と言われた時にぱあっと明るくなった気がした、と嬉しそうに語られます。そして Royal College of Art の修士学コースに入ることを決めたのは陶芸の先生だったフェリシティ・エイリフの励みの言葉があったから、と言われます。二人のことを思い返した尚子さんは「私の色んな絵であったり、版画、写真、陶芸など、さまざまな媒体で私が作品を作っているのを理解してくれ、それぞれの作品が相互作用で影響を与え、強調されているのを理解してくれた教授でした」と懐かしそうに語られました。

私が知り合った頃の尚子さんは、Jagged Art ギャラリーが既に彼女の作品を取り扱っていて、Chelsea Flower Show (1912年から続いている、毎年5月に5日間にわたってロンドンのチェルシー地域で行われる庭・花の祭典で、王族メンバーが訪問することで有名)の参加や、ヨークシャーの方にある彫刻公園にての作品展示などと、常にアート活動でお忙しいイメージがありましたが、ロイヤルカレッジ卒業後の道は色々と苦労も多かったようです。

いわゆるアーティストは星の数ほどいる世界です。劇場やウィンドウディスプレイその他のイベントなどに使われる小道具作りの下準備などの仕事などをしながらの生活。住居も Guardian Scheme (ガーディアンスキ

ム) と言って、空いたビルに、政府の援助で低額の家賃で住むことのできる、というアーティスト間ではよく使われるスキームを長い間使われていた、と言われます。しかし、私の前で、「大切な人に大切な時に知り合ったこと」の素晴らしさを、尚子さん独特のふんわりとした物腰で話す様子から見ると、彼女の芯の強さは計り知れないものなのだろう、と思います。



ヨークシャー彫刻公園から戻って  
来た磁器彫刻

今年の始めには、講師をされている大学の同僚の日本和紙リサーチ旅行のコーディネーターをアーティスト活動の傍に務めたり、3月には、先に書いた Collect Art Fair に、尚子さんも Jagged Art ギャラリーの取り扱いで出展したりとお忙しい日々を過ごされています。

彼女の Multi disciplinary artist としての可能性は生活の端々に見出されると思います。ヨークシャーの彫刻公園から戻ってきたという蝶々の磁器彫刻を見せてくれながら、「苔や蜘蛛の巣がはびこっていた」と微笑ましそうに話してくれる彼女の次の作品は、どんな経験から生み出されるのだろうとワクワクした思いで、私はスタジオを後にしました。



スタジオで作品を背にした尚子さん  
写真撮影：Stefan Stefanou

### 終わりに

2 ヶ月ほどにわたって行ったインタビューですが、3 人の話を聞き終えて、まず最初にしたことは「物事を全うする力」そして「やり遂げるための並々ならない努力」が皆の中では共通点だということです。そして、日本生まれ日本育ちだけど、今イギリスで活動をする理由に、彼女達の才能が伸びたこの国のアートに対する寛容性を、それぞれ状況は違うけれど、体験したことについてを話してくれたことです。

「何かをしてみたい」と思い、そこから行動あるのみ、で進んできた皆さんだと思います。イギリスに定住をするつもりで来たわけではないけれど、四半世紀以上日本から離れて暮らされている3人の話を聞いて、思わず自分と重なってしまう経験だったり、考えが多くあったのは見逃せないでしょう。

みなさんお忙しい時に時間をいただき、本当に感謝をしています。何よりも、改めて、「自分の信じている道を進む、そしてそのための努力は惜しまない」という基本の志をまた私自分に言い聞かせることができたのはこのインタビューの一番の収穫だと思います。どうもありがとうございました。